

Title	牟婁口碑集(雑賀貞次郎編, 郷土研究社発行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.4 (1927. 12) ,p.156(630)- 157(631)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19271200-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近頃の好著述として江湖讀書子に推薦する。(今宮新)

東洋史說苑

(桑原 熾藏著)
弘文堂書店發行

本書は、博士の多年の東洋史研鑽の努力の結果たる論文中より比較的、一般的問題に關するもの二十三篇を撰んで紹介されたものであつて、その全篇の内容は、時事、文化、宗教、風習、氣質、人物、雜纂の七部門に分類されてゐる。その巻頭の辯言にとわられてゐる如く、二三の論文を除いては、凡て何かの機會に公表されたものであるらしい。兎に角、全篇を通じて見るに、何れの論説も、著者が多年の蘊蓄を傾けてなれるもので、輕々に讀破し難きものであるけれども、該博なる知識と、理解力とを以つて、支那の古今にわたつて、その時事を論じ、文化を論じ、宗教を論じ、國民性を論じ、人物を論じ來たり、論じ去る所、日頃拮据難解なる東洋史に倦みたる吾人も、こゝに於ては、幾分氣樂に、東洋史の眞味と興味とを、享有することを覺えるのみでなく、自づと多くの理解力を助けられる氣分がする。吾が國に於ても、東洋史を專攻する學者の中には、その學殖に於ても、識見に於ても歐米の學者に優るとも、遜色のない人達も、少くないといふことであるけれども、何れも専門的分析的研究に没頭される爲めに、専門以外の一般的方面には、餘り顧みられる學者が少いのは、初學者の甚だ遺憾とする所である。著者は、この點に留意されて、東洋史專攻學者と社會一般との接觸を計る爲めに、本書に於て、支那研究者の任務、若しくは、對支文化事業に就いてと題する論

文を掲げ、特に、この缺環に對する専門學者の注意を促すと共に、後輩の者をして、激勵されてゐるのは、大いに味ふべきである。とは言へ、東洋史は、その範圍も廣大にして、その開拓も新しいから、先人未踏の地が多く、従つて、史料の考證と、批判とは容易でないだけに、多大の忍耐と、努力を要するはいふまでもなくその苦辛たるや、實に敬服すべきである。けれども、今や、追々この拮据難解なる支那學も、科學的研究方法と相伴つて、多くの史料や、事實が實證されるに至つたので、他日東洋史も、次第に一般化するには容易になるであらうと信ずる。余は本書は、今日一般の要求を、多少なりとも、充たすであらうと信ずる。若しも、讀者が、この全篇のよく實證され、且つ説明されたる問題を綜合し得るならば、可なり東洋史に對する理解力を、高めるであらうと思ふ。(山本光郎)

牟婁口碑集

(雜質 貞次郎編)
郷土研究社發行

紀州の熊野地方は古くから牟婁とも稱せられて、現在では東西兩牟婁郡は和歌山縣内に、南北兩牟婁郡は三重縣内に編入されてゐる。わが國の歴史において古代には神武天皇の大和入りの上陸地として、中世には熊野三山の信仰や熊野海軍などによつて、この地方が重大なる役目を演じたにかゝはらず、現在では最近漸く風景の美をもつて天下に知られつゝあるやうになつたものゝ其他の點においては、交通不便のためか、なほ一般に知られてゐない。『牟婁口碑集』は、この地方、殊に田邊を中心とした西牟婁郡に

おける民間傳承の集録であつて、『傳説と故事』と『民俗、俗信、行事』との二編に分れ、ところどころ南方熊楠氏の追記を附し、この地方の研究資料として貴重な文献である。たゞそれらの記事の中訂正すべきと思ふ點は、『女の働く風習』の一項である。それによれば口熊野から沿海三輪崎までの間においては、女が働いて男を遊ばせて置く風があるやうであるけれども、これは全く誤解である。評者もこの地方に生れ育つたものであるけれども、かかる風習は未だ見聞したことはない。野良の仕事に女も關與することは、何處においても見られることであるが、その他の勞働に女の従事するのは、男が漁夫、船乗、或は海外出稼者として不在であるとか、或は男が在郷して他の仕事に従事してゐても家が貧しいとかの場合に、家計の一助として働くにすぎない。この地方に海外出稼者の多いことをもつて、女が働く故に男が海外へてゐる風を生じたとみるのは、原因と結果とをとりちがへたのであつて男を遊ばせて置くのを女の誇りとする風習があるのなら、男は何を苦んで海外へなど出るであらうか。この問題については地方民の經濟生活を顧るべきであらうと思ふ。特殊の例をもつて一般の風であるかのやうに誤解することは、他の場合においても往々にして陥る危険であつて、民俗採集には特に注意すべきことであらうと思ふ。本書は爐邊叢書の一冊として最近公にされたものである。(松本芳夫)

老 嫗 夜 譚

(佐々木喜善著)
郷土研究社發行

書 評

東北地方の昔話蒐集家として、すでに爐邊叢書の中において江刺郡昔話や紫波郡昔話等の著書を公にしたる著者が、いままた郷土研究社第二叢書の中において、一百三編の昔話を包含する老嫗夜譚を公にされた。民譚採集の困難をすこしても経験してゐるものにとつては、本書におけるこの多数の昔話が主として一老嫗から聞き得たといふ著者の幸運は、まことに一つの羨望であるとともに、また著者の大なる熱心とたえざる努力とには、全く敬服せざるを得ない。その上著者の用意は文章の上にもたゞそれとがれ、その平明な文體とほどよい方言の混用とは、讀者をして實際に老嫗の話を読みかかるといふやうな感じをさへ起させるほどに、昔話にふさはしい文章である。従つてこの多くの昔話はいづれも非常に面白い。しかし吾々にとつては昔話は單に面白いばかりではない。やはりそこに民衆の生活の反映がなければならぬ。例へばこれらの昔話において、狐や蛇や其他の鳥獸蟲魚が人間と同じやうに活動するが、これらの事實は要するに人間と自然及び自然界における他の生物との關係が、今日よりも遙かに親密であつた時代の記憶である。或はまたこれらの話の比較研究によつて、時代や地方や民族性の特徴をみることもできよう。

時代の急激な變化のために、前代の民衆生活にとつて極めて關係の深かつたものが多く滅びんとしつゝある今日、やはり同じ運命のもとにある昔話を保存することは、前代の理解のために極めて有意義である。ここに著者の勞を多とせねばならない。(松本芳夫)